

(様式第8号)

事業報告書（令和4年度）

事業名 外国にルーツを持つ親子を支援 居場所作りネットワーク

団体名 INE 居場所作りネットワーク 担当者名 森川

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）
<p>1. だんじりへの参加</p> <p>日時：2022年10月8日（土）16：00～18：00</p> <p>場所：岡山市表町商店街、</p> <p>参加対象者：外国にルーツを持つ親子</p> <p>参加人数：9名（INE参加者4名、スタッフ5名）</p> <p>（お祭りには、他に町内会の方々と岡山外語学院の留学生が参加）</p> <p>内容等：表町商店街での秋祭りに参加。</p> <p>冒頭30分ほどは開会セレモニーがあり、16：30頃よりだんじりを引いて商店街内を練り歩く。だんじりを引っ張って歩くことが大半であったが、終盤は子ども2名はだんじりに乗って太鼓をたたいたりした。 終わり頃には神事も執り行われ、解散前には子供にはお菓子が配られた。</p>
<p>2. 国際親子クラブ「岡山鬼伝説を楽しもう！みんなでうらじゃ」</p> <p>日時：2023年2月25日（土曜日）午前10時30分から午後12時30分</p> <p>場所：岡山県青年館（岡山市北区津島東1丁目4-1）</p> <p>参加対象者：外国にルーツを持つ親子・日本人の親子（子供は小学生以下が対象）</p> <p>参加者：計71名（スタッフ9名を含む）</p> <p>参加者の国籍：フィリピン、中国、韓国、アフガニスタン、マレーシア、ベトナム、日本</p> <p>内容等：</p> <p>① まず始めにリトミックから始まり、桃太郎の昔話を「あおぞら保育園」の園児たちが歌と踊りを交えながらわかりやすく伝えてもらった。</p> <p>②講師により「うらじゃ」の説明を日本語、英語、フィリピン語で聞いて一緒に輪になって踊って楽しんだ。</p> <p>③世界の言葉（こんにちは）を資料を使って一緒に学んだり、参加者が持参してくれた民族衣装の試着と写真撮影を楽しんだ。</p>
2. ESDの視点
<p>① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか</p> <p>1.日本文化である祭りに参加し、日本に根付く文化に触れあうことで興味を覚えた様子があり、後日の日本文化を紹介するイベントにも参加した。</p> <p>2.参加者に「楽しかったか」「またやりたいか」「楽しかったプログラムは」「外国の友達が</p>

欲しいか」という4項目のアンケートを実施したところ、「楽しかった」「またやりたい」がほとんどであり、「外国の友達が欲しい」については、否定の回答は0であった。

「楽しかった」、「またやりたい」、「外国の友達が欲しい」との答えの多さ、また参加者より「楽しかった、自分も INE の活動に参加したい」という声をいただくなど、多文化共生の楽しさを体験してもらうことができ、外国の人に出会いたいと思いつつも実際には出会う機会のない人が、本事業で出会ったことを通して自ら行動したいという気持ちを涵養できた。

岡山の伝説「ももたろう」を日本人も外国の人と一緒に楽しみ、「うらじゃ」を踊ることで岡山の文化に触れることができた。いつも INE に参加しているアフガニスタンの人が、うらじゃ踊りの輪に子どもを連れて笑顔で参加し、日本人に中に積極的に入っていく今までには見られなかった姿が見られた。

さらに、10カ国（一般的ではないが岡山に住んでいる人口の多いブラジル語、ベトナム語、マレー語、タガログ語、ネパール語、アフガニスタン語）の挨拶を紹介して声を出して言うことになれもらいながら、会場参加の韓国・フィリピン・中国・ベトナム・アフガニスタンのかたに挨拶をすることで、自分の声で外国の言葉を話し挨拶することができた。みなさん声を合わせて何度も挨拶の言葉を言っており、普通には知らない国の言葉に興味を示し挑戦していた。

② どのように学び合いを取り入れたか

1.各町内子供たちや、海外からの留学生と一緒にだんじりを引いたり、乗ったり、太鼓を叩いたり、神事に参加することで、だんじりの世話人・親子と交流し双方の多文化共生の意識を醸成するきっかけを作った。

2.参加者を多国籍にして出会いの場を設け、「言葉の壁」があっても共に一緒に活動することで「国籍による心の壁」を取り除き、「国籍を超えてもお互いに一緒に楽しむことができる」という「人としての共有感」を体験して多文化共生の楽しさを実感しながらの学びとなるようにプログラムを構成した。うらじゃの講師も外国人に依頼し、日本人でなくても日本文化の講師となれる事例を示した。また会場の外国人にマイクを向けて挨拶の言葉を話してもらい、その人に会場のみならず挨拶をするようにお互いの声かけの場を設けて、挨拶することは難しくないという学びをした。

さらに、高校生にボランティアとして参加してもらい、若い世代に外国人も含めた体験をしてもらい多文化共生の学びの場とした。資料：高校生の感想文

③ どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

1.だんじり祭り実行世話人の方々との事前相談・打合せをもとに、INE 関係者で参加方法・安全確保・広報方法・等を検討し、参加者への案内と当日のフォローを徹底した。また、日本人同様の行動を行い日本人の行動様式を実践し、祭りの意味合いを説明することで日本文化を体感できるようにした。

2.外国人にとっては「言葉の壁」は大きく、日本人にとっても「外国語が話せない」との

思いのためになかなか出会っても共感することができにくい。そこで、言葉ではなく「見る・踊る・聞く・話す」というお互いの言葉を超えて共感できるプログラム内容を考えた。また、子どもの時の楽しい経験は大人になって外国人と出会う際の受け止めの基本となると考え、子どもが外国人と一緒に楽しかったと感じて将来へのステップの一つとなるよう工夫した。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

1. 普段の生活ではなかなか出会うことの少ない日本の伝統文化に触れて頂くことで、日本人の感性に触れていただけたのではないかと考える。

また、歴史ある文化体験の場での日本人との相互のコミュニケーションで、今後の自発的声かけに繋がることが期待でき、今後の INE イベントにも反映できたり、だんじりを主催した商店街の方々やその祭りに参加している日本人にとっても、外国人と一緒に参加することにより、多文化共生社会の実感につながったのではないかと考える。

2. 参加者に多文化共生の楽しさを体験してもらうことができた。これは日本人もそうであるが、日本語がまだ十分話すことができない外国人も日本人と一緒に楽しい思いをすることができた。

25日の実施日の後で、うらじゃの講師をしてくれた外国人が他の場所で「25日にうらじゃを教えてくれた先生ですか」と声をかけてもらうという事例があり、この事業の実施により外国人の活躍が見える化できたと共に、日本人に外国人と出合いで声をかけることができるような「心の壁」を低くできた。

高校生のボランティアの感想にもあるように、現在だけでなく将来的な意欲を喚起できた。この事業に参加した子どもや保護者、ボランティア高校生などに多文化共生の楽しさの経験を提供できた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

1. 外国人ではなかなかキャッチできない日本文化に触れる機会づくりを行う。

また日本語に触れる機会を創造し、日本語能力向上に寄与すること。日本人との交流機会をつくることで日本の生活習慣を修得していただくきっかけをつくる。

2. 今後外国人が来日して一緒に地域・社会で暮らしていくためには社会の意識を変えていくことが必要であり、今回の事業のような取り組みを何度も繰り返すことでより多くの人を巻き込むことができると考える。1度だけでなく継続することで「国籍を超えて一緒に楽しみ共感を得る」活動を実施することが重要ではないだろうか。

入管問題、実習生をめぐるトラブルなど様々な問題が現在起きているが、岡山で広く多文化共生の意味を理解して外国人材を受け入れるためには、まず出会うこと、そして共感できる場を積み重ねること、その経験を通して日本人の意識が変化していくことが重要であり、持続可能な社会づくりへの基盤をなすものであろう。

(様式第8号)

今後も社会の未来と一緒に構築する仲間として、日本人と外国人とが手を繋いでいく社会の実現のために出会いの場を作り、お互いへの対等な理解を進める活動を継続して行きたい。

現在は就学前の子どもとその保護者を対象にしたが、ライフステージに即した課題を解決するための事業を考えたい。

1 だんじりの活動写真



(様式第8号)

2 国際親子クラブ「岡山鬼伝説を楽しもう！みんなでうらじゃ」活動写真



準備の様子



導入部分のリトミック



桃太郎のお話の紹介



うらじゃ踊り



世界の言葉



アンケート回答風景